



Title	長崎地域の特性を生かした生活科教育に関する実践研究：平和公園における大学生の活動の事例
Author(s)	富山, 哲之
Citation	長崎大学教育学部紀要. 教科教育学, Vol.48, pp. 39-47; 2008
Issue Date	2008-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/21403
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T20:35:04Z

長崎地域の特性を生かした生活科教育に関する実践研究

— 平和公園における大学生の活動の事例 —

富山 哲之*

(平成 19 年 10 月 31 日受理)

A Study on the Life Environmental Education that Makes
the Best Use of Characteristics in the Nagasaki Region
～ A Case of University Student's Classes about Experience
Activity in Heiwa Park ～

Noriyuki TOMIYAMA*

(Received October 31, 2007)

1. はじめに

大学の教員養成段階の生活科教育において直接的な体験活動が重要であることは、生活科の新設以来約 20 年間の生活科教育でその重要性が指摘されている通り論を待たない。小学校学習指導要領解説生活編¹⁾によれば、生活科授業の現状について、生活科の学習活動が体験だけで終わっていること。気付きの質を高める指導が十分ではないこと等を挙げている。もっとも、小学校の生活科は、身近な人々、社会及び自然を学習の対象とし、学習の場としている。気付きの質を育む生活科授業を行うために、座学のみ依存しない教材の選択は大切である。地域性を生かすには、地域に密着した教材によって指導することである。^{2, 3)}

自然と触れあう機会が少ない都会では子供たちの活動を多様化させるような教材を提供できる場所として都市公園が挙げられる。その利用目的によって色々な種類に分けられるが、一般的な呼び名では、児童公園、近隣公園、運動公園、総合公園等である。大学の周辺ではやや規模の大きな平和公園がある。この公園は、幹線道路を挟み、東西 2 区域の面積約 19ha の長崎の基幹公園であり、平和の森づくりを基本に再整備されて、今では総合公園の役割を担っている。

長崎に原子爆弾が投下されたのは、1945 年 8 月 9 日午前 11 時 2 分のことであった。爆心地の北側、道を越した少し小高い丘の上の長崎刑務所浦上支所は完全に破壊されて瓦礫の山と化し、構造物の外壁と土台だけが残った。また、付近の学校は筆舌に尽くし難い惨状であったと言う。周知のように、原爆落下中心地に近い平和公園の平和祈念像前の広場では、毎年、平和祈念式典が執り行われている。長崎市の学校では平和教育が盛んである。

* 長崎大学教育学部初等教育講座

各学校の平和学習への取組みは他とは比類のないものであり現在まで継承されている。

以上をもとに、本活動は、公共の場所として様々な要素を持つ地域の公園を生活科学学習の場として、我々を取り巻く現在の環境を考えるだけでなく、戦災からの復興の変遷をより身近に実感できることを目指した公園活動の授業実践の有効性を明らかにすることを目的とする。

本稿では、長崎市の平和公園において平和祈念像や平和の泉が設置されている願いのゾーンで展開された大学生の学習活動について述べる。

2. 授業実践の概要

2.1 事前調査の概要と結果

野外で生活科教育の授業を行うにあたって授業を受ける受講生の興味・関心の度合を知ることが必要と考えた。

そこで、本学部初等教育コース1年次の生活科教育科目の受講生62名を対象として、授業開始時の2007年4月にアンケート調査を実施した。

質問事項は「小学校生活科の授業を計画する場合、長崎地域のどのような事象を学習活動の題材にしたいと思うか。」である。これに対する回答結果は次の通りである。回答率の高い方から順に、①平和公園及びその周辺での活動：38%、②海を中心とする自然体験：32%、③長崎の歴史・文化に関わる活動：28%である。次いで、④平和学習：11%、⑤路面電車：11%、⑥坂の街：8%、⑦普通の公園：8%、という回答があった。①平和公園での活動は、平和学習との関わりから④平和学習の回答率を加えると49%を占める。②海での自然体験はそれに次いでいる。

以上のことから、平和公園及びその周辺での活動についてはもっとも多く肯定的な傾向を示した。従って、受講生の多くが回答した平和公園及びその周辺での活動を取り入れることは、学習者同士が学び合う機会、実際に身の回りの環境に接する機会を創り出すことに重要な意味を持つことと考え、本実践で平和公園での活動を行うことにした。

2.2 授業実践の視点

多くの大人のみならず学生たちが、実際に毎日の生活の中で、公園で活動するような機会は殆どないといっても過言ではない。対象地の平和公園については、既に述べたように、観光地化した著名な公園であり、本学から徒歩で10分余りの所にある。この公園には、平和祈念像や旧長崎刑務所浦上支所遺構を取り巻くように多くの樹種の樹木を植栽してある。また、平和希求の証として平和祈念像と平和の泉、世界各国から寄贈されたモニュメント等が設置されている。その周囲には市街地が拡がり、比較的交通の便もよく、多様な対象との出会いが期待できる。平和公園を身近に感じ、興味を持たせるとともに、それらを含めた多くの自然事象と接する機会を持つことができる。身近な環境に対する関心呼び起こし、判断力を高め、身近な所から行動を起こそうとする態度を育てる上で重要であると考えられる。

2.3 授業実践の時期と内容

本授業計画では、前期において開講される授業の中で、春と夏の季節を選んで平和公園

を題材にした活動を2007年5月17日と同年8月2日に行った。本授業では次の(1)から(4)の4単位時間で構成される。(1)「平和公園を知ろう」、または「平和公園で遊ぼう」を主題にした学習活動案を受講生の一人一人が作成する。学習活動案に基づいて活動内容ごとに1グループ6人程度に受講生を割り振り11グループを構成し、夫々のグループでリーダーを決める。また、野外活動を行うにあたり安全教育は欠かせない。授業では、人の反応時間の測定を取り入れて、受講生らの反応時間を測った。⁴⁾人の動き、車の速度と制動距離、車間距離の関係を示し0.1秒の大切さを解説した。(2)春季の平和公園でグループごとに活動した。1単位時間の半分は大学と公園との間を往復する時間、及び全体説明の時間に充てた。平和公園における活動時間は45分間とした。リーダーは当該グループを小学校の1クラスと想定して活動中は教師役に徹することとした。(3)各グループは、春季の平和公園で活動して調べたことや分かったことを学習発表会で発表した。(4)前出の(2)と同じグループのメンバーで夏季の平和公園において活動した。各グループの全員が春と夏の公園で活動して比較したこと等をレポートに纏めた。

3. 授業実践の様子

3・1 春の平和公園における活動

各グループから提出されたレポートに見る活動の詳細を以下に示す。本時の学習活動案の題目ごとに分類している。

3・1・1 主題「平和公園を知ろう」の実践

第1グループは平和公園に生息する生き物や植物を観察した。スズメやネコ、サクラやツツジ等の馴染み深い動植物であるが、62年前の焼け野原の状態であったことを想像し現在とを比べて、様々な生き物で満ち溢れていることに感動した様子が伺える。

第2グループは世界各国から寄贈され公園に設置されたモニュメントを調べた。多くの国から色々なモニュメントが贈られていることを知り世界中の人々が平和を願っているのだと感じた様子が伺える。

第3グループはモニュメントマップを作成した。調べていく中で、“長崎さるく”のガイドの人達との触れ合いを通して、モニュメントのこと以外に、永井隆博士のことや、長崎が400年前から国際的な都市であったこと等、貴重な話を聞くことができた様子が伺える。

第4グループはモニュメントを見て回り、気に入ったモニュメントをスケッチした。最後の5分間でゴミ拾いをした。大きなゴミはなかったがタバコの吸い殻がたくさんあって少し残念な気持ちになったという記述が見られる。

第5グループはモニュメントを調べた。モニュメントを通して平和について考えていくことはとても大切なことだと感じた様子が伺える。

3・1・2 主題「平和公園で遊ぼう」の実践

第6グループは“こおりおに”の遊びを予定していたが、修学旅行生らが平和祈念像前で黙祷している姿を目のあたりにして、そのような所で鬼ごっこはできないと判断し、切り替えて“生活科平和学習”を行うことにしたという記述が見られる。

第7グループは平和公園の草花マップを作った。刈り込まれた芝生や草生地、剪定された樹木が多く整然とした景観が印象深いと記述している。

第8グループはゴミ拾いをして拾った缶で缶蹴りをして遊ぶ計画をしていたが空き缶が見当たらず遊ぶことを止めて平和祈念像等について調べたことを記述している。

第9グループは活動する範囲を定めて幾つかのモニュメントを調べた。それを対象に各々が気に入ったモニュメントをスケッチした。

第10グループは平和祈念像と幾つかのモニュメントについて調べた。平和公園での活動は平和について考えるよいきっかけであったと記述している。

3・1・3 主題「平和公園で思い出を作ろう」の実践

第11グループはリーダーの説明を聞きながらグループで作ったマップの番号順にモニュメントを調べた。当初は“花いちもんめ”と“缶蹴り”遊びをする予定であったが修学旅行で訪れた小学生らがいたのでその場に相応しくないといい、遊びは取り止めた様子が伺える。

3・2 春の平和公園における活動記録

平和公園で活動した翌週に学習発表会を行った。グループの発表時間は7分間として模造紙に説明文や写真、スケッチしたものを貼付した資料を講義室の前方に展示してグループの一人一人が発表した。

3・2・1 主題「平和公園を知ろう」に関する発表

第1グループは平和公園で見つけた木としてサクラ、クスノキ、ヤマモミジ、マツ、ケヤキ、花として、ツツジ、シロツメクサ、パンジー、生き物として、ハト、ネコ、スズメ、チョウ、ミツバチの写真等を展示した。

第2グループはモニュメント7基を調べた。スケッチ、写真等を展示した。

第3グループは平和公園マップを作りモニュメント17基の写真を展示した。

第4グループはモニュメントの写真とスケッチの数点を展示した。

第5グループは平和祈念像と平和の泉を含む図面に夫々のモニュメントをマップ状にして展示した。

3・2・2 主題「平和公園で遊ぼう」に関する発表

第6グループは平和祈念像の作者である北村西望氏の言葉、平和の泉の記念碑に刻まれた被爆少女の手記と夫々の写真等を展示した。

第7グループは植物8種類とハトとトンボの写真を示して夫々に50字から100字程度の説明文を書き記して展示した。ハトと仲良くなり餌をやったこと、今年になって初めてトンボを見たこと等の清々しい体験をしたことが綴られている。

第8グループは平和祈念像やモニュメントの写真を展示した。樹木の若葉、草花でもって春の平和公園の特長が分かりやすく表されている。

第9グループは写真に頼らずにスケッチ4点を使って記述したものを展示した。

第10グループは平和祈念像を正面または背後から見た写真とモニュメントや慰霊碑等の写真を展示した。

3・2・3 主題「平和公園で思い出を作ろう」に関する発表

第11グループは平和祈念像やモニュメント等の写真18枚を使って記述したものを展示した。スケッチすることによって平和への関心をさらに高めることができたと思う。まずは実際に自分で何らかの“カタチ”で平和にふれることが大切であると感じている。

このような発表会では、学習者同士が学び合う機会の創出、他人の考えを聞くことを通じて、視点や見方・考え方の多様性を学ぶことができると考えられる。

3.3 夏の平和公園における活動

3.3.1 主題「夏の平和公園～春の平和公園と比べよう～」の実践

このときは、南九州方面を通過中の台風5号の影響で風が強く雨が時折り激しく降りだし始めた。荒天にもかかわらず、各グループは、平和公園の季節の移り変わり等を捉えるために予め計画した経路を辿り活動した。公園の樹木は新緑が深まり、生い茂り、小さな花を咲かせているものがあった。春季に平和公園を訪れた時は、修学旅行生が大勢いてかなり賑わっていたが、このときは8月9日の平和祈念式典に向けて、平和祈念像前に仮設の追悼碑が設けられる等の準備作業が行われていた。

各グループの一人一人から提出されたレポートに見られる活動の詳細を以下に示す。春季に訪れた平和公園との変化に注目している。

平和公園には、数多くのモニュメントがある。これについては春に公園を訪れたときに多くのグループが関心を寄せた対象物であった。最新のモニュメントは、昨年、ニュージーランドから寄贈されたものであり、立て札が新たに置かれるという変化に気付いた受講生がいた。それには「作品には手を触れないようお願いいたします」と記され英語、ハンガール語、中国語の4つの言語で表示してある。春の活動で出会ったモニュメントであるが、このようなものに接して、時代が流れ年月が経っても未だ戦争が忘れられておらず、世界各地で平和が希求されていることを実感した様子が伺える。

レポートでは、平和公園の春から夏への季節の移り変わりを何に基づいて判断したかを調べた。このことに関しては圧倒的に樹木や草花の変化で知った受講生が多い。春にはパンジーやビオラ等の花が咲き誇っていた植木鉢も片付けられており、刑務所跡の草叢一面に咲き誇っていたシロツメクサの花は盛りを過ぎていた。春には若葉のような黄緑色であったモミジの葉の色が濃くなり、葉の先の方が赤みを帯びていたと記述している。

夏の植物や生き物ではキョウチクトウ、タンポポ、マツボックリ、またはセミについて詳しく調べたレポートが挙げられる。キョウチクトウが有毒植物であることは先の講義で説明していたので多くの受講生が関心を寄せていたことが分かる。また、この樹木は、原爆により70年間草木も生えないと言われた焦土にいち早く咲いた花で、市民に復興への希望と光を与えてくれた花として広島市の花に指定されている。このことを調べた受講生は数名であった。レポートの感想によれば「いつ来ても公園は綺麗に整備されていて美しい。多くの観光客が訪れる。これからもずっと平和公園が、行けば平和の大切さ、尊さを感じられる場所であって欲しいと思った。」という記述が見られる。小学生の頃から8月9日には学校へ登校し黙祷をしていたという受講生は「戦争と平和についてきちんと学ぶ必要がある。このような経験を次世代に語りついで行くべきである。……平和のありがたさを再確認でき自分にとって非常に意義あるものだった。」と記述している。「夏の平和公園では植物の変化、平和祈念式典へ向けての準備の様子を知ることができた。被爆都市である長崎市の市民として平和への関心を常に持ち続けていたい。」等の記述がある。この活動に関する事として「小学校の生活科でこのように同じ公園で季節の変化を見る、というのはとてもいいことだと思う。……（中略）……生命の移り変わりについても学ぶ

ことができる。また、自分たちの手で変化を探すため、積極性も身に付き、発見した時の喜びも活動の意欲へとつながっていく……(中略)……この活動はとても意義のある活動だと感じた。」という記述が見られる。

春季の平和公園の景観を夫々図1, 図2, 図3, 図4, 図5, 図6に示す。平和祈念像前の広場には全国各地から大勢の修学旅行生が訪れている(図1)。夏季の平和公園の景観を夫々図7, 図8, 図9, 図10, 図11, 図12に示す。8月9日の平和祈念式典に向けて準備が進められている(図7)。受講生らの活動の様子を図6, 図12に示す。

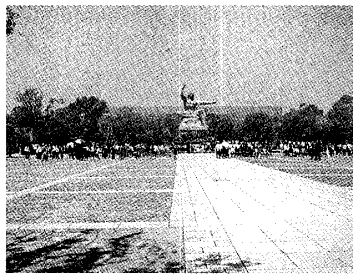


図1 平和祈念像

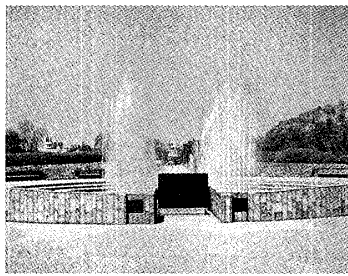


図2 平和の泉



図3 平和公園出入口

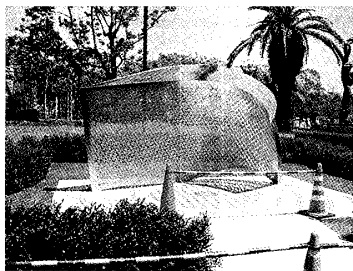


図4 モニュメントの竣工

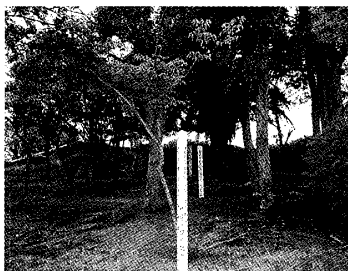


図5 祈念植樹の樹木群

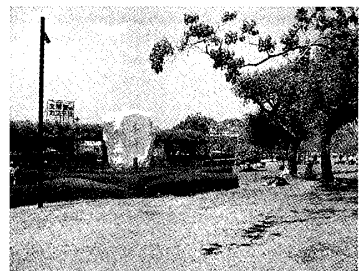


図6 春の公園における活動



図7 平和祈念式典の準備

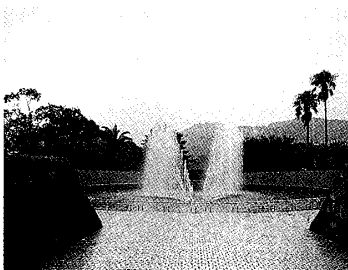


図8 祈念像側からの眺望



図9 千羽鶴

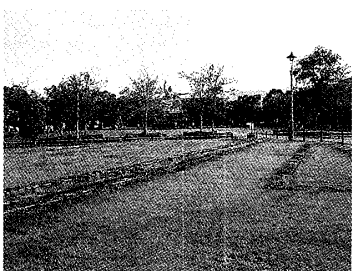


図10 被爆刑務所遺構



図11 キョウチクトウ



図12 夏の公園における活動

4. 授業実践の成果と課題

春と夏の平和公園との比較を通してどのようなことが分かったかどうかを、平和公園での活動の意義等をレポートに記述された内容から検討した。レポートに記録された対象を表1に示す。数値は人数である。

表1 レポートにみる対象の分類

名 称	数	名 称	数	名 称	数
祈念式典の準備物	37	平和祈念像	4	新設モニュメント	9
モニュメント	6	刑務所遺構	3	平和の泉	3
平和の像	3	千羽鶴	2	平和祈念式典	1
ポイ捨てのゴミ	1	自然の変化	11	アブラゼミ	6
クマゼミ	7	ニイニイゼミ	7	セミ	10
セミの抜け殻	6	トンボ	8	バッタ	2
ハチ	2	アシナガバチ	1	ミツバチ	4
チョウ	4	ジョロウグモ	1	ガ	1
テントウムシ	1	アリ	1	ヤモリ	2
カラス	1	ネコ	5	ハト	2
マツボックリ	5	タンポポ	11	シロツメクサ	18
マリーゴールド	2	パンジー	7	ケイトウ	3
ヒルガオ	2	ラベンダー	2	ポーチュラカ	2
ブルーサルビア	1	カタバミ	1	オオバコ	1
ホトケノザ	1	キョウチクトウ	25	キョウチクトウ毒	7
ウバメガシ	1	フジ	8	ヤマモミジ	5
アジサイ	6	ケヤキ	4	ツツジ	8
ラカンマキ	3	ヒイラギ	2	クスノキ	1
マツ	1	サクラ	1	クロガネモチ	1

表1より、春と夏の公園との比較を通して、受講生の約60%が平和祈念式典の準備物を対象にしたことが分かる。8月9日の平和祈念式典を迎えるために平和祈念像前の広場に幾つものテントが張られ、祭壇にはたくさんの生花や千羽鶴等が置かれていた。

次いで、約40%がキョウチクトウを比較の対象にしている。大気汚染に強い樹木であるが有毒植物であるので葉を噛んだり木の汁を皮膚につけない注意が要る。このことは4月頃の講義で説明していたので対象への関心を高めたと考えられる。この樹木の花は大きめであり、夏の強い日差しに映えるピンクの花は印象的である。花期が6～8月であるので春に訪れたときは花が目立たなかったのである。

続いて、約30%がシロツメクサを、約27%がセミを比較の対象にしている。春の公園では刑務所遺構の草地に咲き誇っていたシロツメクサの真白い花が印象深い。夏の公園ではクマゼミの鳴き声の騒々しさが印象的である。

受講生一人あたり平均4.5個の対象物を挙げていることが分かる。多くの受講生は、春には真白いシロツメクサ、夏にはピンクのキョウチクトウまたはセミ等を対象に自然の変

化に気付いたことが分かる。

表2には、受講生らのレポートの記述内容に認められた平和公園の現状に対する理解の他に、春と夏の公園の比較、事象に対する疑問、応用的な発想、自発的行動への喚起等に関する文章による説明を纏めたものである。

表2 公園活動レポート記述内容のカテゴリー別人数

記述内容のカテゴリー	受講生数
(A) 公園の現状に対する理解	60
(B) 春と夏の公園の比較	52
(C) 事象に対する疑問	9
(D) 応用的な発想	10
(E) 自発的な行動への喚起	14

次に、表2の項目(A)～(E)に該当する記述文の事例を「 」内に抜粋して示す。

項目(A):「遊ぶための」場所、条件を考慮しておらず、実際、そういう遊びは相応しくないことから急遽予定を変更した。そして、平和学習に来ていた小学生の行事を見ながら、どんな学習の仕方が良いのかを観察した。」

項目(B):「5月、春に訪れた時は新緑が芽生えた時期で公園全体が緑につつまれていたが、今回は公園のところどころに色鮮やかな花が見られた。ラベンダーなどの草花、夾竹桃などの木の花である。」

項目(C):「このように、春と夏とでは平和公園の様子がだいぶ違うのだが平和公園を訪れた人にどのような影響を促すのだろうか。」

項目(D):「私たちは、生き物や植物からたくさんの癒しとエネルギーをもらっている。これは平和公園に限った分けではないが、私たちは生き物や植物を大切にしていかなければならないと思う。植物がなければ私たちは呼吸をしつづけていないだろうし、食生活にも影響が出ていだろう。」

項目(E):「生活科の授業を単なる活動に終わらせることなく、日常生活に発展させ児童の気付き心を養っていける授業をできる教師になりたいと思った。」

夫々の割合は、項目(A)、(B)が97%、84%で高率であるが、項目(C)と(D)は夫々15%、16%の低率である。項目(E)は34%である。

このように、平和公園の自然物や人工物を題材とすることで、受講生の多くは平和公園の現状に対する理解や春と夏の季節の比較に対して肯定的な意識をもつことができたと推察される。だが、事象に対する疑問や理解を応用する発想の展開に対しては意識が低いようである。今後の課題として、受講生らの中に芽生え始めたであろう事象への知的な気付きを活発にし科学的思考にまで深化させるような支援が必要と考えられる。

今回の平和公園における活動では、大勢の修学旅行生が訪れる平和公園で遊ぶということは相応しくないことに気付いて活動の主題を変更したグループが見られた。受講生の多くは、次の夏の平和公園を訪れるときに、自然の変化に着目したい、平和祈念式典に参加したいと思った。また、平和学習に発展させたい、平和公園という場所は平和を見つめ直すのに最も適した場であると考えている。

学習発表会の段階では、見聞きしたり、調べたりしたことを意欲的にポスター形式の発表に纏めることができた。発表活動において気付きや分かったこと、自分の思いなどを“文章化する・絵に表す・言葉で表す”等により、学習したことをより一層深め、同時に表現力も高めることができると考えられる。受講生各人が様々な発見をする機会となった。

5. おわりに

今回授業に取り入れた平和公園での活動体験は、小学校生活科で目指されている公共物や公共施設の利用、季節の変化と生活への関わりを具体化しつつ生活科教育実践を試みたものである。受講生たちのレポートからは、今回の平和公園での活動が有意義なものであったと評価され、印象に残り、授業内容の理解、学習意欲の向上と関連性があることを示唆させる内容が読み取られた。

今後の課題として、生活科の目指す、すべて多くの“人・物・事”との繋がりの中で“人”との繋がりが希薄であったように思われる。平和公園での学習活動は、季節ごと年に四回、これから秋季・冬季に行うことができるので次の機会に“人”との繋がりを検討し、本教育実践の改善を目指すことにしている。

附記

本稿は、日本生活科・総合的学習教育学会第16回全国大会（2007年6月、ちば・旭大会）の発表資料に加筆・修正を行い作成したものである。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省編：小学校学習指導要領解説生活編（平成11年）2.
- 2) 例えば、小宮山潔子：生活科教育の展開，学文社（1996）182.
- 3) 例えば、佐々木 昭：生活科教育の研究，学文社（1998）153.
- 4) 愛知・岐阜物理サークル編著：いきいき物理わくわく実験2，日本評論社（1999）32.